

特集 本州最南端の海上保安署 串本海上保安署

本州最南端の地で 豊かな海を守る

和歌山県南部、太平洋に突き出た本州最南端の地、串本町。豊かな自然に恵まれた観光名所でもあるこの地域には、地元漁師だけでなく県外からも多くの漁船や釣り人が訪れる。また太平洋を行く船の通航路としても賑わっており、人々の生活に密着した海の姿を見せていた

取材・文 / 中島敦 (オンライン)



本州最南端の串本町。北緯33度に位置し、これは八丈島とほぼ同緯度となる。この付近は“台風の通り道”ともなっている。2011年の台風12号は和歌山県内で多いところでは1800mmもの降雨を記録し大きな被害をもたらした。



目立つ釣りの事故

第五管区海上保安本部田辺海上保安部
串本海上保安署は、本州最南端の地、和歌山県東牟婁郡串本町に位置する。湾を挟んで目の前には潮岬と、そこから、くしもと大橋で結ばれた紀伊大島の景観が広がる。リアス式海岸で複雑に入り組み、周辺は観光地として親しまれているだけでなく、漁場にも恵まれている。マグロ、カツオ、伊勢エビなどの水揚げがあり、人々の生活は豊かな海と深く結びついているのだ。

串本海上保安署には、署長以下5名の職員が勤務する。また、PC型巡視艇『むろづき』が配備されており、2クルーが1年365日交替で勤務している。

この地域に目立つ海難が磯場での人身



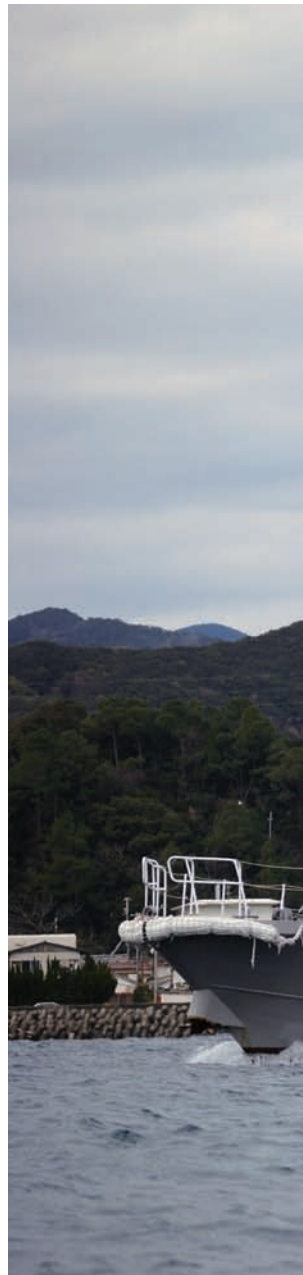
お話を伺った矢野署長。串本の勤務は3回目を数える。



釣り人にとって磯場は絶好のポイントとなる。陸からのアクセスが難しい場合は渡し船でポイントに向かう場合も多い。高波には細心の注意が必要だ。

事故だ。釣り人が誤って、あるいは波にさらわれて海に転落する、というケースが後を絶たない。また好漁場に恵まれているが故の密漁取締りも欠かすことができない。さらにこの海域は貨物船や漁船、それに観光船が頻繁に行き来するため船舶海難にも細心の注意が必要だ。太平洋を航行する船は、南に突き出した潮岬を掠めるように最短距離で航路を取り、この海域に集中するからだ。

「漁師さんにしても釣り人にしても、



地元の方は減多に事故は起こしませんが、県外から来られる方は注意が必要です」と説明するのは串本海上保安署の矢野正行署長だ。太平洋に面したこの地域は外洋の影響を受けるため、波の穏やかなきにも突然「一発波」と呼ばれる高波が発生することがある。それを知らない釣り人が波に飲まれるケースが多いのだ。

万が一海に落ちてしまったとき、ライフジャケットの着用が生存率を左右する重要なポイントとなる。自分は泳げるかと過信する人もいるだろうが、荒れた

波間から磯場や防波堤に上がることの難しさは経験した人間でなければイメージしにくいだろう。

「ですから、釣り人に対して注意を促し、ライフジャケットの着用を訴える看板を設置しています。従来、設置場所は釣りのポイント付近を選んでいましたが、これからは幹線道路など、より目立つ場所を選んでいく予定です」と矢野署長は、今後さらに積極的な対策を講じていくと説明した。

ところで和歌山県南部と言えば、台風の通り道」として知られるエリアだが、

大事故発生への対応を念頭に置いています 城山 啓助 (37) ■巡視艇むろづき 主任航海士



串本は潮岬があるため貨物船の航行が激しい地域ですので、いざ事故発生となると大事故に繋がる可能性が高いと感じています。そういった事故に対応するための技術の習得を欠かすことはできません。巡視艇『むろづき』には潜水士としての経験を積んだ職員も乗船しています。昨年船舶同士の衝突事故がありました。幸い大きな被害には繋がらなかった。ただ、衝突具合によっては海洋環境に影響を及ぼすような大きな被害が発生した可能性はありました。この辺りは好漁場でもあるので、そうになったら被害は大きかったでしょう。

神戸や大阪、姫路などと比べると外洋に面しているため担当海域は非常に広くなります。昨夏、エンジントラブルが発生した漁船を曳航しましたが、外洋での経験はここならではのものです。



意外にも台風による事故はそう多くないという。地元の人々は台風の力を知り尽くしているだけに、その対応にも慣れてきているからだ。とはいえ、土砂崩れなど激

太地町では毎年9月から翌年4月にかけて小型捕鯨の追い込み漁(通称イサナ漁)を営んでいる。漁の時期には反捕鯨団体の活動家が多数出入りするため、第五管区海上保安本部では鯨類追込網漁業警戒本部を設置し、和歌山県警察と連携して警戒にあたっている。田辺海上保安部には現地警戒本部を、太地町内には串本海上保安署の臨時駐在所を設けてゴムボートを配備。巡視船艇でのパトロールと併せて違法行為を未然に防止している。



しい自然の猛威による被害は避けようもない。2011年9月にこの地を襲った台風12号は、多いところで年間降雨量に匹敵する1800mmという驚異的な雨量で土砂崩れなど多大な被害をもたらした。この時、新宮市や那智勝浦町など交通が寸断された地域に串本海上保安署の職員2名が駆けつけ、飲料水が枯渇していることを確認。巡視船からの給水活動に結びついた。

また串本町の東に位置する太地町では、古来より鯨やイルカを狙うイサナ漁が盛んに行われているが、これに反感を抱く反捕鯨団体などの活動からも目が離せないことから陸上のみならず、海上の警戒を怠ることはできないという。

湾内、外洋を隈なくしよう戒

串本海上保安署の巡視艇『むろづき』は、東は第四管区海上保安本部との境界となる熊野川、西は田辺海上保安部との境界までをしよう戒する。一見すると狭いエリアにも思えるが、前述のように釣り人や漁師の安全確認や密漁のチェックなど、入り組んだ海岸線を進みひとつひとつの湾内で丁寧な巡視を繰り返す。

取材日、『むろづき』は、くしもと大橋をくぐって串本港を出ると、まずは進路を西に取って本州最南端の地である潮岬付近のしよう戒にあたった。貨物船、漁船、そして遊漁船と交通量は多い。反転して東へ進路を取り、管内で最も東の



一日も早く、使える人材になりたい
田古 一徳(21) ■巡視艇むろづき 機関士補

海上保安学校を卒業し、昨年4月から巡視艇『むろづき』に乗船しています。身内に海上保安官がいたのが入庁のきっかけです。安全指導で漁港などに行き、釣りをされている方など自分よりも年配の方に話しかけたいのですが、最初のうちはどう話しかければいいのか分からず緊張しました。でもこっぴど緊張すると相手にもそれが伝わってしまいます。最近は「何が釣れますか?」と話しかけるなど、いろいろ工夫して大分慣れてきました。相手の方から「いつもご苦労さん」などと声を掛けていただくこともあり、人と関わる仕事を選んで良かったと感じることもあります。海上保安学校を出て1年も経っていませんが、まだまだ現場で戸惑ったり、先輩に質問してしまうことがあります。早く現場で使える人材になればと感じています。現場では不測の事態が起こったりしますが、そういう時に機転が効く人になりたいですね。

港である新宮港方面へと向う。

紀伊大島の南岸は険しい崖が続いているが、その海岸線にチラホラと釣り人の姿が見える。陸上からアクセスするのは難しいので、渡し船でポイントに赴き、帰りもピックアップしてもらうのだ。トルコ軍艦遭難慰霊碑がある紀伊大島東端



洋上から本州最南端の地である潮岬、潮岬灯台を望む。

を通過、左手に海岸線を見ながら太地湾、森浦湾、勝浦湾、さらに天満湾と巡る。

新宮港では無人の漁船を発見。しばらく様子を窺うと、少し離れたところに浮きがあり、素潜り漁をしていることが確認された。「ひとりで漁をされていると、誤って海に落ちてしまう人もいますから」と、三好隆志船長は漁師の無事を確認してから港を離れた。

帰路の勝浦湾口ではマグロ漁船が停止しているのを発見。気のせいか船体が傾いているように見える。機関の故障などトラブルの可能性もあるので、声をかけようかと思った矢先、マグロ漁船は何事もなかったかのように進み始めた。

「沿岸には釣り人や漁船も多いですし、密漁も少なくありません。海側を見れば貨物船など外国船も多く行きかっている。不審な動きをしている船がないか、



常に気を使っています」。

釣り人の事故、漁船のトラブル、密漁、そして外洋に行く船舶の事故……

『むろづき』の乗組員は、穏やかに見える海に厳しい視線を巡らせ、串本港へと戻った。



湾内で見かけた無人の釣り船。しばし待機して素潜りの漁師を確認する。

懸念される南海トラフ地震に備えて

この日は湾内や沿岸部を巡った巡視艇『むろづき』だが、実はもうひとつ、重要な役割がある。いざ南の海上で事故が発生した場合には、本州最南端に基地を構えているという立地条件から、第一陣として現場に駆けつけることになるのだ。遥か沖合い、時には帰路の燃料が足りなくなるような所まで駆けつけなければならぬことも。「そういうときは、帰りは燃料の消費を抑えるために低速で戻ることも考えます」と矢野署長。「厳しい仕事を終えた後だけに、早く帰ってあげたい気持ちはありますが、一刻も早く現場に到着するためには仕方ありません」。

ん」。

またもう1点、矢野署長はこの地域の特徴として南海トラフ地震への対応についても付け加えた。「今後30年以内の発生確率が高いとされる南海トラフ地震ですが、地形上、この地域は津波に非常に弱いと言わざるをえません。湾内にいる船は軒並み被害を受けるはずで、それは巡視艇も例外ではありません。地震発生時に運良く航行していた船は助かる、といった程度でしょう。湾に隣接しているこの保安署も、なるべく早い時期に高台への移転を検討しています。被災地になった場合、まずは我々が活動できる拠点が必要ですから」。

自然に恵まれ、美しく豊かな本州最南端の地で、串本海上保安署は南の海の安全と安心を守り続けている。

串本港に停泊する巡視艇『むろづき』の前で。三好船長以下、『むろづき』の乗組員。

